

釧路公立大学（2019年リーグ戦2部4位）

8月29日、釧路市芦野の釧路公立大のグラウンド。平年を7度上回る最高気温28.1度の猛暑の中で、釧路公立大アメリカンフットボール部の練習が始まった。選手17人のうち、ただ1人の4年生を含む5人が就職活動などで欠席し、けがで3人が裏方に回ると、防具を付けたのは9人。上下黒の練習用ユニホームと金色のヘルメットの中に、1年生の白いヘルメットも混じる。WR早川溪太主将（3年）が「めっちゃ暑いけれど、水分をしっかりと取って頑張ろう」とハドルで声をかけ、ランニングが始まった。

道がコロナウイルス対策の緊急事態宣言を2月28日に出し、釧路公立大も構内立ち入り禁止と部活動の自粛を決めたが、釧路地方の感染が沈静化したため、6月1日に部活動の再開が認められた。ただし、感染防止対策のためにコンタクトは無し条件付き。1年生8人を加えた部員たちは走り込みから再開し、7月中旬からは防具を着けて週4回の練習へとペースを上げてきた。毎朝の検温と練習前の体調チェックも忘れない。

ランニングに続きストレッチで筋肉をほぐすと、俊敏さを高めるアジリティトレーニング。給水タイムの後はダミーが登場し、ブロックの形を確認する練習が始まった。滋賀県の強豪・虎姫高アメフト部出身のQB柴田雅大（3年）が「地味な練習がまだまだ続きます」と言いながら、1年生部員に体の使い方を何度も教えた。4回目の給水の後、ダミーを使ったタックル練習だ。「しつこくいやらしいタックルをしないと、相手は倒れてくれない。京大はギャングタックルやけど、俺たちは『クレインズ（鶴＝チームのニックネーム）タックル』を目指そう」と柴田の声が飛んだ。

1988年に経済学部単科大として開学した釧路公立大。アメフト部も同年創部した。これまでの最高成績は2016年の2部優勝。4戦全勝で初制覇したが、1部最下位の札幌大との入れ替え戦に敗れ、念願の1部昇格は逃した。17年以降は3年間で0勝11敗1分けと勝利から遠のき、雌伏の時間が続いている。

網走の東京農業大と同様に、試合の時は札幌まで車で6時間かけて移動するハンディキャップとも戦う釧路公立大。岩手県出身の泉川主将は「高校はバドミントン部。大学では新しいスポーツをしたかった」と入部。4戦全敗に終わった昨季はけがで試合に出られなかったが「今年は全勝優勝が目標。リーグ戦の形式がどうなるか分からないが、目の前の敵に勝つ」と気合を込める。柴田は「高校時代に悔しい思いをしたので、大学でもアメフト部に入った。自分の限界に挑戦できるところが魅力」と言う。

2人が口をそろえるのが4年ぶりの勝利。泉川主将は「入部してから勝利を経験していない。絶対に勝ちたい」と力を込め、柴田は「チームでTD経験者は2人だけ。今年はバックス6人が3本ずつTDを取る」と勝利への執念を口にした。期待の新人、秋田・花輪高でインターハイのハンマー投げに出場経験を持つC児玉宗己（1年）も「腕力は自信があるので、ブロックで自分の役割を果たしたい」と決意した。



【ダミーを使いタックル練習をする釧路公立大のアメフト部員たち】